外国人交換留学高校生の日本留学に対する印象
Foreign High School Exchange Students' Impressions of Study in Japan

岡部　悦子

本稿では、外国人交換留学高校生の体験記を対象に、日本留学に対する印象の分析を試みた。その結果、外国人交換留学高校生の日本留学に対する印象は、「Ⅰ．留学は良い経験だ」「Ⅱ．異文化を知り、様々な体験をした」「Ⅲ．異文化の中で苦労しながらも人間関係を築いた」「Ⅳ．AFSのプログラムで留学した」という大きく4つのグループに分類できた。これらの個々のグループの結果を国別に見ると、留学の意義や異文化体験の捉え方、人間関係の構築、ホスト・ファミリーとの過ごし方に違いがあることが観察された。

The main purpose of the present study was to analyze foreign high school exchange students' impressions of study in Japan using reports on their experiences in Japan. As a result of an analysis with the KJ-method, impressions could be categorized into 4 groups, which were: "Ⅰ. Study abroad was a good experience"; "Ⅱ. I learned about a different culture and had various experiences"; "Ⅲ. I built up new relationships through the hardship of living in a different culture"; "Ⅳ. I joined the AFS study abroad program".
Examination of each group revealed that judgments of the value of exchange programs and of experierces of cultural difference, human relationship-building and communication with host families, differed depending on students' native countries.

1．はじめに

思春期における異文化体験、とりわけ海外での留学体験は人間の発達・人格形成にも重大な影響をもたらすものである。本稿では、海外から日本の高校に約1年間留学する、「外国人交換留学高校生」に焦点をあて、その日本留学に対する印象を分析することを目的とする。

高校生の「交換留学」とは、もともとアメリカ国務省の推薦した「フルブライト人物交流計画」の一環として始められたもので、期間を1学年間と限り、海外の一般家庭に滞在、滞在地域の主として公立高等学校に進学することにより、その地域に住む人たちとさまざまな交流の機会を通じて自国の文化を伝え、あるいは滞在国の文化を学ぶことを目的としたプログラムのことをさす（高留連2002：2）。「交換」には「文化を交換しあう」という意味に重点がおかれ（高留連2002：69)、高校生と滞在国の人々との相互交流を深める貴重な機会となっている。この「交換留学」は、財団法人エイ・エフ・エス日本協会（以下、AFS）をはじめとする教育交流団体の運営によって行なわれるものや、学校間・姉妹都市間の協定によるものなど様々な運営形態があり、その全体像を把握することは難しい。高校生の国際教育交流事業を実施する諸団体の組織である「全国高校生留学・交流団体連絡協議会」に加盟する10団体が2002年度に受け入れた「外国人交換留学高校生」の数は

561人であった。この数は、同年度における3ヶ月以上の高等学校等への外国人留学生の総数1478人[1]の38.0%にすぎないが、4年前の1998年と比べ26.4%増加している。また2002年度における日本の高校での3ヶ月以上の外国人留学生の受入れ者数も、4年前と比較すると9.5%の増加[2]となっており、緩やかながら今後も増加していくことが予想される。

このような高校時代の「交換留学」の機会を通じて、生徒達の大きな成長が期待できる反面、留学生活は必ずしも容易なものではなく、日本語能力の不足によるホームシック、受入れ学校・家庭への不適応などによって、心に深い傷を得て帰国する場合もある。国際交流基金の2003年度海外日本語教育機関調査によれば、世界の日本語学習者約236万人のうちの6割にあたる約153万人が中等教育段階の学習者である。中等教育段階での日本語教育を中心とした国際交流は益々進むことが予想されるが、この年齢層を対象とした日本語教育、とりわけ異文化適応の問題も孕む交換留学生に対する日本語教育研究は質量ともに不足し途上の段階である。交換留学生の日本語の習得と異文化適応との関係を明らかにすることは、中等教育段階の国際交流の促進に必要な研究課題といえるであろう。

2．先行研究

外国人留学生の日本への適応に関する研究は、大学生を対象にしたものは岩男・萩原（1988）をはじめ多くみられるが、それと比較して高校生を対象とした研究は、まだ研究例が少ない。

このような中での貴重な研究に長井（1988）がある。この研究は、交換留学高校生の心理的な問題点を健康状態から把握しようとしたもので、CMI健康調査表を用いて14か国出身の93名を対象に実施した調査である。

その結果、健康状態を表す指標に男女の性差は見られないものの、東南アジア諸国出身の留学生はその他の留学生に比べ、疾病頻度および不適応感が継時的に有意に高かったことが報告されている。また、同時に行なわれた質問紙調査から、受入れ家庭では、その家庭の微妙な人間関係や門限・愛情表現の方法など生活習慣の違いに対して、また受入れ校では、校則や言葉の障壁に対して適応の難しさを感じていることが明らかにされた。さらに、男子に比べ、女子のほうが受入れ家庭の内外で不快な体験をより多く、日本社会への適応が困難であると述べている。

交換留学高校生の異文化適応と日本語学習を関連づけた研究に、村野（2001）がある。
村野（2001）は、PDAQ法という質問紙調査を用いて留学生がホスト文化である日本文化に対してどのような距離感を感じるかということを数値化している。92名の留学生を対象にした結果、文化的距離と出身地域は関連があることを示している。日本文化と最も距離を感じているのはアジア出身者であった。アジア出身者は地理的に近くても、心理的には遠いことがわかる。ヨーロッパ出身者は日本文化と自文化の両方の距離を近く認識している。南アメリカ出身者以外の出身者は来日5か月後に自文化との距離が小さくなり日本文化との距離が大きくなる傾向があるのに対し、南アメリカ出身者は5か月後に日本との距離が小さくなる傾向がみられる。この結果について村野（2001）では、文化的な距離は、来日前に接触する日本に関する情報の量・質が影響しているのではないか、と考察している。さらに村野は(2001)は、文化的距離と日本語能力との関係について分析を行っている。その結果、日本語学習に成功した日本語能力中上位グループの留学生には、Acton（1979）が指摘する、「学習者が自文化からも、日本文化からも等しい距離に自分自身を位置づける状態」の「よい学習者」の傾向が見られるが、日本語習熟度の低い留学生にはその傾向が見ら

れないことから、日本語能力と文化的距離との関連を認めている。ただし、来日5か月を過ぎると自文化に近づき、日本文化から離れ、文化的距離の感じ方は多様化し、さらに滞在がのびると再び自文化から離れるという傾向もみられることから、村野は「Actonの指摘した文化的距離の等距離のパターンは、言語学習と文化学習の結果ではなく、よい学習者が通過する文化学習の一つの段階」とし、「二つの文化に対して同様に距離を持つ心的状態を経験することが言語学習と文化学習を進めるのではないか」と述べている(村野2001：255)。

長井（1988）・村野（2001）は、100名近い留学生を対象とした調査であり、その結果の信頼性は高く、高校留学の全体の傾向を知るのに大きく役立つ貴重なものである。結果を通じて、交換高校留学生の異文化適応には出身地域と日本語能力が関係していることが推測されるが、両者とも統計的な処理に適するよう質問項目を単純化しているため、留学生が具体的にどんな経験や体験に対し、どのように感じているのかという「生」の声は反映されにくくなっている。CMI健康調査表、PDAQ法のいずれも、病気や怪我の症状の有無や文化的距離の遠近など、症状の一部はわかっても、それぞれの症状や心理的態度の原因などはわからない。留学生への指導や受入体制の構築を考える際には、さらに具体的な留学生活上の問題点を洗い出し、整理・検討が必要になってくると思われる。

3．研究方法

3－1　目　　的

先行研究から、交換留学高校生の異文化適応には留学生の出身地域と日本語能力との関連性が示唆されている。本研究では留学生が、日本留学という経験をどのようにとらえ、その中で日本語学習をどのように位置づけているかという点について、留学生自身が書いた留学体験記を分析することを通じて明らかにしていくことを目的とする。留学生自身の言葉の中から留学生活に対する印象をさぐり、それを整理しながら、異文化適応の問題、とりわけ異文化適応と日本語学習との関係について考察を行なう。

3－2　対　　象

本研究では、財団法人東京国際交流財団が平成14年10月に発行にした、『東京都高校生留学事業＜第12回受入＞の記録』を研究の対象とする。この事業は、財団法人東京国際交流財団が、東京都が昭和63年に設置した「東京都国際平和文化交流基金」により、異文化体験を通じて国際的な視野を広め、市民レベルの国際的な相互理解を深めることを目的に、東京都の姉妹友好都市やアジア諸国より高校生を東京に招き、1年間受け入れるというものである。事業は、東京都、東京都教育委員会、東京私立中学高等学校協会、および留学生派遣国の教育委員会等の協力の上、AFS日本協会へ一部業務委託されて実施された。この事業は平成13年度に休止となったが、13年間にわたり8か国411名の高校生を受け入れている。本研究では、最後の受入事業となった平成12年度の＜第12回受入＞の記録を対象に考察を行なう。

この記録には、平成12年度の留学生24名と、それぞれのホスト・ファミリー、ホストスクール教員による作文、計72編が納められている。本研究では、1編あたり400字詰めの原稿用紙4枚程度からなる留学生の文章を調査の対象とし、日本留学に対する印象を探っていく。留学生の国別内訳は中国3名、タイ3名、インドネシア6名、マレーシア3名、オーストラリア6名、ブラジル3名である。このうち、18名が女子、6名が男子である。

この記録の価値は、一定量のまとまりのある文章として、留学生の「生」の声が観察できる点にある。もちろん、広く一般に公開・配布さ

れる公的資料としてあまりふさわしくない話題や、読み手にとって不快なものは避けられていたり、ホストファミリーや高校教員の援助を受けながら書かれていることも考えられるため、多少の「フィルター」がかかったものであることは念頭におく必要はある。しかしながら、全く見当のはずれた関係のないものである可能性は極めて低く、むしろ援助を受けることにより、留学生だけでは表せなかったものが表現可能になったとも考えることができる。また、留学生の出身国はいずれも、平成14年度の文部科学省の調査の結果、日本で受け入れている留学生の多い国上位14位以内に入っている国であり[(3)]、この文章から現在の交換留学の一側面を観察することができると思われる。さらに留学生の出身地域は、オセアニア・アジア・南米という、先行研究において異文化適応の差が指摘された地域でもあり、異文化適応と出身地域の関係性についても新たな知見を見出せるのではないかと考えた。

3－3　分析方法

先に述べた24編の留学生の留学体験記を、文化人類学者川喜田二郎氏が開発したKJ法により分類を行った。まず、第一次作業として、留学生の文章の中から、留学中の体験やそれに対する印象、留学中に考えたことなど、留学体験を語る要素を抽出すると、740項目となった。次に、第二次作業としてそれらの項目をグループ化し、その結果をマッピング化する作業を行った。その後、第三次作業として、マッピング化した結果を留学生の国籍別に再度分析し、留学生の出身国別の特徴を検討した。なお、第一次作業・第三次作業は筆者が行い、第二次作業は筆者と協力者１名の計２名で行なった。

4．結果・考察

4－1　全体的な傾向

KJ法で分類した結果をマッピング化すると、【図１】のようになった。【図１】のように、外国人高校留学生の日本留学に対する印象は、大きく４つのグループに分類することができた。まず第１のグループは、「Ⅰ．留学は良い経験だ」というものである。留学生は、「F留学生活を経験して良かった」と、留学生活全体に価値を見出していることがわかる。また、「A良いこともつらい事もいい経験だ」と、プラス面だけでなく、マイナスの経験も含めて、留学の意義を肯定していると考えられる。このグループの中で最も多かったコメントは、「B留学して自分自身や社会を見つめ直した」というものである。この中の個別の要素としては、「留学前と留学後で変わった」「留学して成長した」「留学中に将来のことを考えた」というものが含まれていたが、留学経験を通じて留学生自身が成長したことについて、多くの留学生が意義を見出していることがわかる。

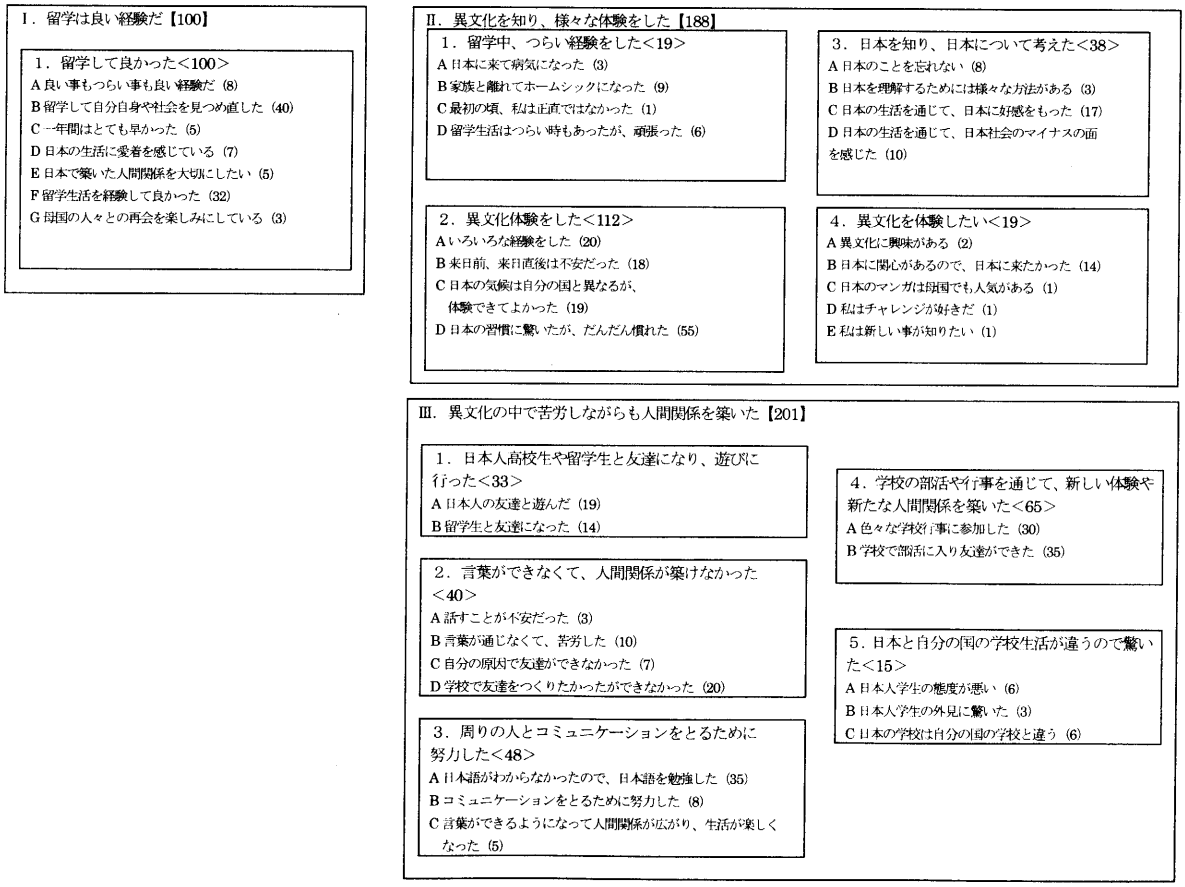
第２のグループは、「Ⅱ．異文化を知り、様々な体験をした」というものである。この中はさらに４つの下位グループが含まれているが、その中で最も多くみられた要素は、「２．異文化体験をした」であった。「C日本の気候は自分の国と異なるが、体験できてよかった」「D日本の習慣に驚いたが、だんだん慣れた」のように、母国と異なる日本の気候や習慣にとまどいながらも、生活に適応していった様子がうかがわれる。旅行へ行ったり、スピーチ大会や地域の小学校との交流など、「Aいろいろな経験をした」ことも、新しい体験として印象深く残っていることがわかる。また、留学先である「３．日本を知り、日本について考えた」ということも、多くの留学生が体験することであろう。ここには日本に対するプラスの印象もマイナスの印象も含まれている。病気やホームシック、異

文化での心の葛藤は「1．留学中、つらい経験をした」にまとめることができる。これらの異文化体験は、「4．異文化を体験したい」という留学生の好奇心や冒険心、日本への興味が動機づけとなっていると考えることができよう。

第3のグループは、「Ⅲ．異文化の中で苦労しながらも人間関係を築いた」というものである。異文化の中で、新たな人間関係を築くことは容易ではないが、「4．学校の部活や行事を通じて、新たな体験や新たな人間関係を築いた」、プリクラ・カラオケ・旅行など「1．日本人高校生や留学生と友達になり、遊びに行った」など、様々な体験を共有するという方法で人間関係を広げていったことがわかる。逆に、人間関係を構築する上で障害になった大きな要因は、「2．言葉ができなくて、人間関係が築けなかった」という下位グループがあるように、言葉の問題であろう。この中には、「A話すことが不安だった」「C自分の原因で友達ができなかった」というように、留学生自身の言語能力の不足や言語不安による要因がある一方、「D学校で友達をつくりたかったができなかった」という中に「友達を作ろうとしたがうまくいかなかった」という要素があったように、努力しても相手が歩み寄ってくれないために友情関係が結ばれないこともある。そのほか、「5．日本と自分の国の学校生活が違うので驚いた」という、価値観の違いも人間関係に影響していると考えられる。様々な困難がありながらも、日本語を勉強することを中心に、自ら「3．周りの人とコミュニケーションをとるために努力」していたことがわかる。

第4のグループは「Ⅳ．AFSのプログラムで留学した」というものであるが、高校生活・ホームステイ・キャンプ・研修・関係者への謝辞など、この留学プログラムを通じての体験や感想が含まれる。この中でもっとも多くの要素が集まったのは、「3．ホームステイを体験した」であり、「1．日本で高校生活を体験した」を上回り、留学生

【図1　KJ法による、外国人交換留学高校生の日本留学に対する印象のマッピング】



Ⅳ. AFSのプログラムで留学した【247】

1．日本で高校生活を体験した<80>
A 日本の学校の校則に驚いた (11)
B 日本の学校で勉強した (6)
C 学校のクラスメートや先生と交流した (17)
D 日本の高校に通った (4)
E 電車で通学することは大変だった (9)
F ショートステイプログラムに参加した (7)
G 初めて学校に行った (11)
H 学校が楽しくなかった (6)
I 学校に行って良かった (9)

2．AFSの行事に参加した<13>
A AFSのキャンプで日本の説明を受ける (2)
B AFSのキャンプに参加してよかった (5)
C これは良い留学プログラムだ (2)
D AFSの友達が私の日本の生活を励ましてくれた (1)
E AFSの友達と一緒に日本に来た (1)
F AFS生とTMG生になってうれしかった (1)
G 留学ボランティアの人達はすばらしかった (1)

3．ホームステイを体験した<125>
A ホストファミリーと生活して良かった (12)
B ホストファミリーとの生活はうまくいかないこともあった (8)
C 自分の国ではなく、自分の家族ではない (1)
D ホストファミリーと生活して、色々なことを教えてもらったり、一緒に出かけたりした (104)

4．関係者に感謝している<29>
A AFSに感謝している (4)
B ホストファミリーに感謝している(5)
C 学校の先生に感謝している (4)
E 友達に感謝している (2)
以下、各1名
F 友達やホストファミリーの支えに感謝している
G 困ったこともあったが、ホストファミリー、AFSボランティア、友達のおかげで、すばらしい一年になった
H 一緒に過ごした人に心から有難うを言いたい
I AFSの皆様、学校の先生、ホストファミリーに大変お世話になり、感謝している
J AFSやホストファミリーや友達や学校に有難うと言いたい
K TIF、ホストファミリー、ホストスクール、日本語の先生、友達はかけがえのない存在で、感謝している
L まず初めにTMGとAFSに、日本に来る機会を与えてくれたことに感謝したい
M ホストファミリー、ホストスクール、LPさん、日本のみなさんに大変お世話になり、感謝している
N ホストスクールに感謝したい
O ホストファミリー、友人たちに感謝している
P 留学の機会を与えてくれたTMGやAFSに大変感謝している
Q 色々な経験をさせてもらって、感謝している
R 留学の機会を与えてくれた機関に感謝している
S 心から本当にありがとうございました

活の中心となっていることがわかる。高校生活については、「A日本の校則に驚いた」「E電車で通学することは大変だった」「H学校が楽しくなかった」等にも要素が集まり、留学生活の中でも困難が多かったとものと考えられる。

4－2　出身国別の傾向

長井（1988)、村野（2001）の先行研究から、外国人高校交換留学生の異文化適応には、留学生の出身や日本語能力が関係していることが示唆されているが、今回対象とした資料からはどのような傾向がみられるだろうか。先に整理した外国人交換留学高校生の日本留学に対する印象の結果を、留学生の出身国別にまとめ直したものが【表1】である。今回対象としたデータでは、留学生の国別内訳が中国3名、タイ3名、インドネシア6名、マレーシア3名、オーストラリア6名、ブラジル3名と一定ではないため、その数字の大きさを比較したり有意差を見出したりすることはできないが、6か国の結果を並べて観察できる共通点や相違点について、可能な範囲で考察を行うことにする。

第1のグループ「Ⅰ．留学は良い経験だ」をみると、6カ国の留学生すべてに「1．留学してよかった」という下位グループに属する要素が見られた。しかし、さらにその内訳をみてみると、「F留学生活を経験してよかった」について、タイの留学生に該当する要素が見られなかった。第1グループに含まれる要素の数もタイの留学生のもが最も少なく、留学生活への満足度について質の違いがあることが予想される。

第2のグループは「Ⅱ．異文化を知り、様々な体験をした」であるが、ここでは特に下位グ

ループの「2．異文化体験をした」に注目したい。最も要素の数が多いのがオーストラリア、最も少ないのが中国となっており、この中の内訳「D日本の習慣に驚いたが、だんだん慣れた」でも同様の傾向がみられる。ここには、英語・西洋文化圏であるオーストラリア人留学生と、漢字・東洋文化圏である中国人留学生との日本に対する印象の差が明確に表れているといえよう。また、同じアジア圏でも「D」の要素の数は、中国・タイに比べ、マレーシア・インドネシアの数のほうが大きくなっている。これにはイスラム圏・非イスラム圏という宗教の違い、所得水準の違い、教育制度の違い等、様々な要因が考えられる。長井（1988）や村野(2001)などの量的調査では、相対的な地理上の分布を重視してこれらの国々を同一の「アジア諸国」として統計処理をしているが、異文化適応の問題を考える場合、「アジア」という枠組みの立て方について再検討する必要があることが示唆される。

第3のグループは「Ⅲ．異文化の中で苦労しながらも人間関係を築いた」であるが、このグループは個々の下位グループごとに少しずつではあるが異なる傾向が観察される。「1．日本人高校生や留学生と友達になり、遊びに行った」では、オーストラリアが最も多く、タイが最も少ない「0」という結果となっている。ごくわずかな違いであるが、「友達と遊ぶ」ということは人間関係構築上、大変重要なことであり、留学生活の満足度にも大きく影響する問題であると思われる。第1グループ「Ⅰ．留学は良い経験だ」でタイの数が少なかった要因の一つに、この結果も何らかの影響を与えていることが予想される。「2．言葉ができなくて、人間関係が築けなかった」で注目すべき点は、「C言葉が通じなくて苦労した」において、オーストラリアが最も少ない「0」という結果となっていることである。日本の学校教育で英語教育が定着しており、ほとんどの日本人がある程度の英語の知識があることは、英語圏のオーストラリアの留学生にとっては他の言語を母語とする留学生に比べ有利な条件であるといえるであろう。それに対し、「言葉が通じなくて苦労した」という記述が最も多いのはブラジルで、日本語も英語もわからず、最初のうちは全く言葉が通じないという状況となっている。

第4のグループは「Ⅳ．AFSのプログラムで留学した」であり、4－1でも述べたようにこの中で最も中心となった「3．ホームステイを体験した」であった。しかし、その内訳にはやはり国別に差が見られた。特に「Dホスト・ファミリーと生活して、いろいろなことを教えてもらったり、一緒に出かけたりした」については、マレーシアが「3」で他の国と比べて数値が低くなっているのが注目される。現時点で特定の要因は不明であるが、留学生とホームステイの関わり方について、さらに詳しい分析が必要であると思われる。

【表１　外国人交換留学高校生の日本留学に対する印象　―国別内訳―】

中国			タイ			マレーシア			インドネシア			オーストラリア			ブラジル			計
Ⅰ	留学は良い経験だ		Ⅰ	留学は良い経験だ		Ⅰ	留学は良い経験だ		Ⅰ	留学は良い経験だ		Ⅰ	留学は良い経験だ		Ⅰ	留学は良い経験だ		
1	1留学してよかった	14	1	留学してよかった	10	1	1留学してよかった	26	1	1留学してよかった	18	1	1留学してよかった	17	1	1留学してよかった	15	100
A	良い事もつらい事も良い経験だ	2	A	良い事もつらい事も良い経験だ	2							A	良い事もつらい事も良い経験だ	2	A	良い事もつらい事も良い経験だ	2	8
B	留学して自分自身や社会を見つめ直した	3	B	留学して自分自身や社会を見つめ直した	6	B	留学して自分自身や社会を見つめ直した	17	B	留学して自分自身や社会を見つめ直した	4	B	留学して自分自身や社会を見つめ直した	3	B	留学して自分自身や社会を見つめ直した	7	40
C	一年間はとても早かった	1				C	一年間はとても早かった	2	C	一年間はとても早かった	2							5
			D	日本の生活に愛着を感じている	2				D	日本の生活に愛着を感じている	4	D	日本の生活に愛着を感じている	1				7
E	日本で築いた人間関係を大切にしたい	2										E	日本で築いた人間関係を大切にしたい	2	E	日本で築いた人間関係を大切にしたい	1	5
F	留学生活を経験して良かった	4				F	留学生活を経験して良かった	7	F	留学生活を経験して良かった	8	F	留学生活を経験して良かった	9	F	留学生活を経験して良かった	4	32
G	母国の人々との再会を楽しみにしている	2													G	母国の人々との再会を楽しみにしている	1	3
Ⅱ	異文化を知り、様々な体験をした	17	Ⅱ	異文化を知り、様々な体験をした	14	Ⅱ	異文化を知り、様々な体験をした	40	Ⅱ	異文化を知り、様々な体験をした	46	Ⅱ	異文化を知り、様々な体験をした	49	Ⅱ	異文化を知り、様々な体験をした	22	188
1	留学中、つらい経験をした	4	1	留学中、つらい経験をした	1	1	留学中、つらい経験をした	3	1	留学中、つらい経験をした	2	1	留学中、つらい経験をした	6	1	留学中、つらい経験をした	3	19
												A	日本に来て病気になった	3				3
B	家族と離れてホームシックになった	2				B	家族と離れてホームシックになった	3				B	家族と離れてホームシックになった	3	B	家族と離れてホームシックになった	1	9
			C	最初の頃、私は正直ではなかった。	1													1
D	留学生活はつらい時もあったが、頑張った	2							D	留学生活はつらい時もあったが、頑張った	2				D	留学生活はつらい時もあったが、頑張った	2	6
2	異文化体験をした	7	2	異文化体験をした	10	2	異文化体験をした	22	2	異文化体験をした	21	2	異文化体験をした	36	2	異文化体験をした	16	112
A	いろいろな経験をした	1	A	いろいろな経験をした	4				A	いろいろな経験をした	4	A	いろいろな経験をした	9	A	いろいろな経験をした	2	20
B	来日前、来日直後は不安だった	5	B	来日前、来日直後は不安だった	4	B	来日前、来日直後は不安だった	5	B	来日前、来日直後は不安だった	1	B	来日前、来日直後は不安だった	3				18
						C	日本の気候は自分の国と異なるが、体験できて良かった	7				C	日本の気候は自分の国と異なるが、体験できて良かった	6	C	日本の気候は自分の国と異なるが、体験できて良かった	6	19
D	日本の習慣に驚いたが、だんだん慣れた	1	D	日本の習慣に驚いたが、だんだん慣れた	2	D	日本の習慣に驚いたが、だんだん慣れた	10	D	日本の習慣に驚いたが、だんだん慣れた	16	D	日本の習慣に驚いたが、だんだん慣れた	18	D	日本の習慣に驚いたが、だんだん慣れた	8	55
3	日本という国を知り、その国について考えた	4	3	日本という国を知り、その国について考えた	0	3	日本という国を知り、その国について考えた	12	3	日本という国を知り、その国について考えた	15	3	日本という国を知り、その国について考えた	4	3	日本という国を知り、その国について考えた	3	38
A	日本のことを忘れない	4				A	日本のことを忘れない	1				A	日本のことを忘れない	2	A	日本のことを忘れない	1	8
									B	日本を理解するためには様々な方法がある	3							3
						C	日本の生活を通じて、日本に好感をもった	5	C	日本の生活を通じて、日本に好感をもった	8	C	日本の生活を通じて、日本に好感をもった	2	C	日本の生活を通じて、日本に好感をもった	2	17
						D	日本の生活を通じて、日本社会のマイナスの面を感じた	6	D	日本の生活を通じて、日本社会のマイナスの面を感じた	4							10
4	異文化を体験したい	2	4	異文化を体験したい	3	4	異文化を体験したい	3	4	異文化を体験したい	8	4	異文化を体験したい	3	4	異文化を体験したい	0	19
									A	異文化に興味がある	2							2
B	日本に関心があるので、日本に来たかった	2	B	日本に関心があるので、日本に来たかった	3	B	日本に関心があるので、日本に来たかった	3	B	日本に関心があるので、日本に来たかった	3	B	日本に関心があるので、日本に来たかった	3				14
									C	日本のマンガやアニメはインドネシアでとても人気がある。	1							1
									D	私はチャレンジが好きだ。	1							1
									E	私は新しい事が知りたい。	1							1

Ⅲ	異文化の中で、苦労しながらも人間関係を築いた	38	Ⅲ	異文化の中で、苦労しながらも人間関係を築いた	18	Ⅲ	異文化の中で、苦労しながらも人間関係を築いた	22	Ⅲ	異文化の中で、苦労しながらも人間関係を築いた	45	Ⅲ	異文化の中で、苦労しながらも人間関係を築いた	53	Ⅲ	異文化の中で、苦労しながらも人間関係を築いた	25	201
1	日本人高校生や留学生と友達になり、遊びに行った	9	1	日本人高校生や留学生と友達になり、遊びに行った	0	1	日本人高校生や留学生と友達になり、遊びに行った	1	1	日本人高校生や留学生と友達になり、遊びに行った	7	1	日本人高校生や留学生と友達になり、遊びに行った	14	1	日本人高校生や留学生と友達になり、遊びに行った	2	33
A	友達と遊んだ	1							A	友達と遊んだ	6	A	友達と遊んだ	11	A	友達と遊んだ	1	19
B	留学生と友達になった	8				B	留学生と友達になった	1	B	留学生と友達になった	1	B	留学生と友達になった	3	B	留学生と友達になった	1	14
2	言葉ができなくて、人間関係が築けなかった	9	2	言葉ができなくて、人間関係が築けなかった	1	2	言葉ができなくて、人間関係が築けなかった	5	2	言葉ができなくて、人間関係が築けなかった	11	2	言葉ができなくて、人間関係が築けなかった	3	2	言葉ができなくて、人間関係が築けなかった	11	40
									A	話すことが不安だった	1	A	話すことが不安だった	2				3
B	言葉が通じなくて苦労した	2	B	言葉が通じなくて苦労した	1	B	言葉が通じなくて苦労した	1	B	言葉が通じなくて苦労した	1				B	言葉が通じなくて苦労した	5	10
						C	自分の原因で友達ができなかった	4				C	自分の原因で友達ができなかった	1	C	自分の原因で友達ができなかった	2	7
D	学校で友達をつくりたかったができなかった	7							D	学校で友達をつくりたかったができなかった	9				D	学校で友達をつくりたかったができなかった	4	20
3	周りの人とコミュニケーションをとるために努力した	13	3	周りの人とコミュニケーションをとるために努力した	7	3	周りの人とコミュニケーションをとるために努力した	4	3	周りの人とコミュニケーションをとるために努力した	12	3	周りの人とコミュニケーションをとるために努力した	10	3	周りの人とコミュニケーションをとるために努力した	2	48
A	日本語がわからなかったので、日本語を勉強した	9	A	日本語がわからなかったので、日本語を勉強した	4	A	日本語がわからなかったので、日本語を勉強した	3	A	日本語がわからなかったので、日本語を勉強した	10	A	日本語がわからなかったので、日本語を勉強した	8	A	日本語がわからなかったので、日本語を勉強した	1	35
B	コミュニケーションをとるために努力した	1	B	コミュニケーションをとるために努力した	3				B	コミュニケーションをとるために努力した	2	B	コミュニケーションをとるために努力した	1	B	コミュニケーションをとるために努力した	1	8
C	言葉ができるようになって人間関係が広がり、生活が楽しくなった	3				C	言葉ができるようになって人間関係が広がり、生活が楽しくなった	1				C	言葉ができるようになって人間関係が広がり、生活が楽しくなった	1				5
4	学校の部活や行事を通じて、新しい体験や新たな人間関係を築いた	7	4	学校の部活や行事を通じて、新しい体験や新たな人間関係を築いた	8	4	学校の部活や行事を通じて、新しい体験や新たな人間関係を築いた	6	4	学校の部活や行事を通じて、新しい体験や新たな人間関係を築いた	12	4	学校の部活や行事を通じて、新しい体験や新たな人間関係を築いた	25	4	学校の部活や行事を通じて、新しい体験や新たな人間関係を築いた	7	65
A	色々な学校行事に参加した	2	A	色々な学校行事に参加した	4	A	色々な学校行事に参加した	2	A	色々な学校行事に参加した	3	A	色々な学校行事に参加した	16	A	色々な学校行事に参加した	3	30
B	学校で部活に入り友達ができた	5	B	学校で部活に入り友達ができた	4	B	学校で部活に入り友達ができた	4	B	学校で部活に入り友達ができた	9	B	学校で部活に入り友達ができた	9	B	学校で部活に入り友達ができた	4	35
5	日本と自分の国の学校生活が違うので驚いた	0	5	日本と自分の国の学校生活が違うので驚いた	2	5	日本と自分の国の学校生活が違うので驚いた	6	5	日本と自分の国の学校生活が違うので驚いた	3	5	日本と自分の国の学校生活が違うので驚いた	1	5	日本と自分の国の学校生活が違うので驚いた	3	15
						A	日本人学生の態度が悪い	4	A	日本人学生の態度が悪い	2				A		0	6
			B	日本人学生の外見に驚いた	2	B	日本人学生の外見に驚いた	1							B		0	3
						C	日本の学校は自分の国の学校と違う	1	C	日本の学校は自分の国の学校と違う	1	C	日本の学校は自分の国の学校と違う	1	C	日本の学校は自分の国の学校と違う	3	6
Ⅳ	AFSのプログラムで留学した	25	Ⅳ	AFSのプログラムで留学した	57	Ⅳ	AFSのプログラムで留学した	25	Ⅳ	AFSのプログラムで留学した	41	Ⅳ	AFSのプログラムで留学した	64	Ⅳ	AFSのプログラムで留学した	35	247
1	日本で高校生活を体験した	6	1	日本で高校生活を体験した	18	1	日本で高校生活を体験した	14	1	日本で高校生活を体験した	22	1	日本で高校生活を体験した	15	1	日本で高校生活を体験した	5	80
			A	日本の学校の校則に驚いた	1	A	日本の学校の校則に驚いた	2	A	日本の学校の校則に驚いた	7	A	日本の学校の校則に驚いた	1				11
B	日本の学校で勉強した	1							B	日本の学校で勉強した	1	B	日本の学校で勉強した	3	B	日本の学校で勉強した	1	6
C	学校のクラスメートや先生と交流した	2	C	学校のクラスメートや先生と交流した	4	C	学校のクラスメートや先生と交流した	2	C	学校のクラスメートや先生と交流した	4	C	学校のクラスメートや先生と交流した	3	C	学校のクラスメートや先生と交流した	2	17
			D	日本の高校に通った	1				D	日本の高校に通った	3							4
			E	電車で通学することは大変だった	5	E	電車で通学することは大変だった	1	E	電車で通学することは大変だった	3							9
						F	ショートステイプログラムに参加した	4				F	ショートステイプログラムに参加した	3				7
			G	初めて学校に行った	7	G	初めて学校に行った	2	G	初めて学校に行った	1	G	初めて学校に行った	0	G	初めて学校に行った	1	11
H	学校が楽しくなかった	3							H	学校が楽しくなかった	1	H	学校が楽しくなかった	2				6
						I	学校に行って良かった	3	I	学校に行って良かった	2	I	学校に行って良かった	3	I	学校に行って良かった	1	9
2	AFSの行事に参加した	0	2	AFSの行事に参加した	3	2	AFSの行事に参加した		2	AFSの行事に参加した	2	2	AFSの行事に参加した	4	2	AFSの行事に参加した	4	13
			A	AFSのキャンプで日本の説明を受ける	2													2

												B	AFSのキャンプに参加して楽しかった	1	B	AFSのキャンプに参加して楽しかった	4	5
												C	これは良い留学プログラムだ	2				2
												D	AFSの友だちが私の日本の生活を励ましてくれた。	1				1
			E	AFSの友だちと一緒に日本に来た。	1													1
									F	AFS生とTMG生になってうれしかった。	1							1
									G	留学ボランティアの人たちはすばらしかった。	1							1
3	ホームステイを体験した	15	3	ホームステイを体験した	35	3	ホームステイを体験した	5	3	ホームステイを体験した	14	3	ホームステイを体験した	37	3	ホームステイを体験した	19	125
A	ホストファミリーと生活して良かった	2	A	ホストファミリーと生活して良かった	3	A	ホストファミリーと生活して良かった	2	A	ホストファミリーと生活して良かった	1	A	ホストファミリーと生活して良かった	1	A	ホストファミリーと生活して良かった	3	12
			B	ホストファミリーとの生活はうまくいかないこともあった	3							B	ホストファミリーとの生活はうまくいかないこともあった	5				8
			C	自分の国ではなく、自分の家族ではない。	1													1
D	ホストファミリーと生活して、色々なことを教えてもらったり、一緒に出かけたりした	13	D	ホストファミリーと生活して、色々なことを教えてもらったり、一緒に出かけたりした	28	D	ホストファミリーと生活して、色々なことを教えてもらったり、一緒に出かけたりした	3	D	ホストファミリーと生活して、色々なことを教えてもらったり、一緒に出かけたりした	13	D	ホストファミリーと生活して、色々なことを教えてもらったり、一緒に出かけたりした	31	D	ホストファミリーと生活して、色々なことを教えてもらったり、一緒に出かけたりした	16	104
4	関係者に感謝している	4	4	関係者に感謝している	1	4	関係者に感謝している	6	4	関係者に感謝している	3	4	関係者に感謝している	8	4	関係者に感謝している	7	29
						A	AFSに感謝している	3				A	AFSに感謝している	1				4
B	ホストファミリーに感謝している	1							B	ホストファミリーに感謝している	1	B	ホストファミリーに感謝している	1	B	ホストファミリーに感謝している	2	5
									(1)	お父さんとお母さんが僕のためにしてくださったことはいつまでも心から感謝している。	0	(1)	お父さんとお母さんが僕のためにしてくださったことはいつまでも心から感謝している。	0	(1)	お父さんとお母さんが僕のためにしてくださったことはいつまでも心から感謝している。	1	1
(2)	ホストファミリーから多くのことを教えてもらい、感謝している。	1							(2)	ホストファミリーから多くのことを教えてもらい、感謝している。	0	(2)	ホストファミリーから多くのことを教えてもらい、感謝している。	0	(2)	ホストファミリーから多くのことを教えてもらい、感謝している。	0	1
									(3)	ホストファミリーにはあまり言わなかったが、「本当にありがとう」とおじいさんになっても言いたい。	0	(3)	ホストファミリーにはあまり言わなかったが、「本当にありがとう」とおじいさんになっても言いたい。	1	(3)	ホストファミリーにはあまり言わなかったが、「本当にありがとう」とおじいさんになっても言いたい。	0	1
									(4)	ホストファミリーには最初の日からお世話になり、感謝している。	0	(4)	ホストファミリーには最初の日からお世話になり、感謝している。	0	(4)	ホストファミリーには最初の日からお世話になり、感謝している。	1	1
									(5)	ホストファミリーのあたたかい気持ちや励ましに感謝している。	1	(5)	ホストファミリーのあたたかい気持ちや励ましに感謝している。	0	(5)	ホストファミリーのあたたかい気持ちや励ましに感謝している。	0	1
			C	学校の先生に感謝している	1	C	学校の先生に感謝している	1							C	学校の先生に感謝している	2	4
			D	東京都に感謝している	1	D	東京都に感謝している	1				D	東京都に感謝している	2				4
												E	友達に感謝している	2				2
F	友達やホストファミリーの支えに感謝している。	1																1
						G	困ったこともあったが、ホストファミリー、AFSのボランティア、友達のおかげで、すばらしい一年になった。	1										1
												H	一緒に過ごした人にこころから有難うをいいたい。	1				1

															I	AFSの皆様、学校の先生、ホストファミリーに大変お世話になり、感謝している。	1	1
												J	AFSやホストファミリーや友だちや学校にありがとうと言いたい。	1				1
									K	TIF、ホストファミリー、ホストスクール、日本語の先生、友達はかけがえのない存在で、感謝している。	1						1
															L	まず初めにTMGとAFSに、日本に来る機会を与えてくれたことに感謝したい。	1	1
												M	ホストファミリー、ホストスクール、LPさん、日本のみなさんに大変お世話になり、感謝している。	1				1
						N	武蔵野女子高等学校に感謝したい。	1										1
O	ホストファミリー、友人たちに感謝している。	1																1
												P	留学の機会を与えてくれたTMGやAFSに大変感謝している。	1				1
									Q	色々な経験をさせてもらって、感謝している。	1							1
R	留学の機会を与えてくれた機関に感謝している。	1																1
															S	心から本当にありがとうございました。	1	1

5．まとめと今後の課題

本稿では、外国人交換留学高校生の体験記を対象に、日本留学に対する印象の分析を試みた。その結果、外国人交換留学高校生の日本留学に対する印象は、「Ⅰ．留学は良い経験だ」「Ⅱ．異文化を知り、様々な体験をした」「Ⅲ．異文化の中で苦労しながらも人間関係を築いた」「Ⅳ．AFSのプログラムで留学した」という大きく4つのグループに分類できた。これらの個々のグループの結果を国別に見ると、留学の意義や異文化体験の捉え方、人間関係の構築、ホスト・ファミリーとの過ごし方に、特に違いがあることが観察された。

日本に派遣される外国人交換留学高校生を考える場合、共通して見出せることは、つらいことを含めて、留学生活で得た経験を肯定的にとらえていることであった。母国とは異なる習慣を体験したり、友人と遊びに行ったり、学校の部活動への参加、ホームステイなど、新しい経験をし、それを通じて自分自身が変わっていくということについて留学の意義を見出しているのではないかと思われる。また国別の傾向を見ると、英語・西洋文化圏であるオーストラリア人留学生は、他の5か国の留学生と比べ、英語が日本社会で普及している分、コミュニケーション上有利な立場にあることが推測される。一方、ブラジル人留学生は英語も日本語も理解せず、コミュニケーションの手段が限られるため、不便な生活をしていることがわかる。また、今回の研究の対象に中国・タイ・マレーシア・インドネシアなどのアジア諸国が4か国含まれていたが、分類結果を国別にみると、従来同一の「アジア」として処理をしてきた部分について国別の差が観察された。そのため、今後も外国人交換留学高校生全体としての傾向を見ると同時に、留学生それぞれの母語や文化に配慮した細かな分析が必要であると思われる。今回の調査は、外国人交換留学高校生の全体の傾向を見出すことが主な目的であった。今回の調査結果をもとに、今後は調査対象とする留学生の出身を絞り込み、留学生の背景にある言語、教育制度、文化、人間関係上の価値観等の特徴にも配慮しながら、さらに日本で受け入れた外国人交換留学高校生の異文化適応について、研究を深めていきたい。

謝　辞

長崎外国語大学3年岩永紀子さんには、2004年10月から2005年3月にかけて、約半年にわたり分類作業にご協力いただきました。この場を借りて改めて感謝申し上げます。また、長崎外国語短期大学2年山口美幸さん、山本沙織さん、大平智子さんには、本研究の構想段階で貴重なコメントをいただきました。あわせて感謝申し上げます。（学年は、いずれも2004年度のもの。）

付　記

本研究は、日本学術振興会平成16年度科学研究費補助金　若手研究（B）「外国人交換留学高校生の日本語習得と異文化適応」（課題番号：16720124）の助成によるものである。

参考文献

岩男寿美子・萩原滋（1988）『日本で学ぶ留学生―社会心理学的分析』勁草書房

川喜田二郎（1970）『続・発想法』中央公論社

国際交流基金『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・2003年－(概要版)』http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/oversea/survey.html

文部科学省（2004）「平成14年度高等学校等における国際交流等の状況（概要）」http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/05/04051101.htm

村野良子（2001）『高校留学生に対する日本語教育の方法』東京堂出版

長井進（1988）「外国人交換留学高校生の日本にお

ける適応過程」『心理学研究』第59巻　第1号　日本心理学会　37-44頁
奥田純子（2004）「個人研究入門　第6回　データの整理からリサーチ・デザインへ」『月刊日本語』9月号　アルク　40-43頁
佐々木ひとみ・木村周（1996）「留学生とホスト・ファミリーが認知するホームステイにおける適応課題　―米国短期留学生を対象として―」『教育相談研究』第34巻 31-43頁
田中共子・横田雅弘（1992）「在日留学生の居住形態とストレス」『学生相談研究』Vol.13　No.2 51-59頁
財団法人東京国際交流財図（2002）『東京都高校生留学事業〈第12回受入〉の記録』
全国高校生留学・交流団体連絡協議会〔略称：高留連〕編集・発行（2002）『高校生交換留学プログラム要覧2002　―異文化体験学習―』
全国高校生留学・交流団体連絡協議会〔略称：高留連〕編集・発行（2003）『高校生交換留学プログラム要覧2003　―異文化体験学習―』

(1) 文部科学省（2004）「平成14年度高等学校等における国際交流等の状況（概要）」によれば、日本での2002年度における3ヶ月以上の外国人留学生の受入れ者数は1478人であった。

(2) 同調査によれば、日本での2000年度における3ヶ月以上の外国人留学生の受入れ者数は1350人であった。

(3) 同調査によれば、2002年度における3ヶ月以上滞在した外国人留学生の出身国で、第1位中国（262人）、2位オーストラリア（250人）、5位タイ（63人）、9位ブラジル（43人）、13位マレーシア（23人）14位インドネシア（18人）となっている。

okabe@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp